

法住寺合戦考

—— 知康の（ヲコ）性をめぐって ——

朴 恩 姫

第一節 はじめに

寿永二年（一一八三）十一月十九日、木曾義仲は当時後白河院の御所であつた法住寺殿を襲撃し、院を五条内裏に幽閉し、殿上人四九人を解官するなど、院政を一時的に停止させた。いわゆる法住寺合戦とその結果である。この合戦そのものは、義仲の先制攻撃という形で始まっているが、実際においては、御所の城郭化や十一月十七日の後白河院による最後通牒など、院方の揺さぶりや挑発が目立つ合戦であつた。ところが、このような院方の積極的な取り組みにもかかわらず、合戦は義仲軍の圧倒的な勝利に終わり、武家の力を都の人々に遺憾なく見せつけることになる。鹿谷陰謀事件が同じく院近臣の主導によって計画されたものの未遂に終わったのに対して、法住寺合戦は、都の真ん中で合戦が行われ、しかも院方の惨敗に終わったという面で、鹿谷陰謀事件以上の衝撃を貴族社会に与えたといえる。法住寺合戦は「院（公家）の側が直接に武力をもつて武家に対抗しようとした初めての事態であり、それがあつけない敗北を喫してしまったという点でも、後の承久の乱の先蹤^{〔1〕}」をなす衝撃的事件であつた。

さて、承久の乱の雛形とも言われる法住寺合戦は、『平家物語』のなかではどのように描かれているのだろうか。まず注目すべきことは、先行研究が指摘しているように、異常なほどに平知康という院近臣が前景化されていることである。確かに『平家物語』の法住寺合戦というと、四天王像の絵を貼った甲をかぶり、金剛鈴と鉦をもつて築垣の上に昇つて舞う知康の印象的な姿がまず頭のなかに浮かぶ。ところが、法住寺合戦に関する同時代の史料を調べてみると、意外に知康

の名前があまり見当たらない。法住寺合戦と関連して知康の名前が出てくるのは『愚管抄』³だけで、その他は後白河院が主体になって兵を集めたという表現になっている。『愚管抄』さえも、知康と大江公朝の名前が並んでおり、どちらかといえば、当時の代表的な院近臣として二人の名前があげられている感じがする。そして当然のことながら知康の義仲に対する〈私怨〉に関する記事もない。知康と義仲の個人的な感情が火種になって法住寺合戦が起ったということは、『平家物語』の諸本が一致するところであるが、この設定は、先行研究が指摘しているように、『平家物語』の創作であるとみてよからう。つまり、〈私怨〉というモチーフを介することによって、知康は過剰なスポットライトを受けて、『平家物語』の舞台上に登場したわけである。

では、なぜこのように知康が前景化されなければならなかったのだろうか。院方の大將軍としての知康の活躍ぶりは物語のなかで如何なる意味をもっているのだろうか。当時知康は、「法皇近日第一近習者⁴」として威勢をふるっていた。寿永二年平家都落ちの際に、比叡山へ脱出する後白河院のお供をし、叡山に駆けつけてきた吉田経房の拜調を仲介し、そして院が義仲・行家と対面する時に介添していた人物が知康であったことは、あまりにも有名な話である。また、都落ちした平資盛は知康に使者を送り、知康を通して法皇に別れた悲しみや帰郷の願いを訴えるが、この逸話は彼の後白河院に対する影響力を遺憾なく物語っている。後白河院の側近中の側近という立場上、知康が法住寺合戦に積極的に加わり、或る役割を担っていたことは想像に難くない。本稿では、院方と武家の対決としての法住寺合戦が、知康と義仲の個人的感情による合戦に置き換えられる時に派生する効果、つまりそれは事件の重みや深刻さの稀薄化を意味するが、その効果に着目しながら、『平家物語』の法住寺合戦記事のなかでの知康の役割を分析しようとする。その際、鼓判官というあだ名をめぐめる義仲と知康の滑稽なやりとりや、合戦中の知康の行動の不可解さ、知康の鎌倉行きを語る後日譚などに見える笑い・滑稽・言語遊戯といった要素に注目しようと思う。というのは、知康の行動にまつわる〈笑い〉こそ、法住寺合戦記事の全体のトーンを決めており、合戦そのものを戯画化する役割を果たしていると思うからである。知康の〈ヘラコ〉なる人物としての活躍の意味を明らかにし、法住寺合戦記事のベースにある〈笑い〉の構造を分析することによって、歴史的事件の物語への変容という問題について考察することにする。

第二節 呪術的所作と〈神懸かり〉——追儼行事と飛礫を中心に——

『愚管抄』は、院方が義仲軍の武力にあっけなく敗れてしまった法住寺合戦を二回にわたって天狗の仕業だと叙述している。ところが、その二回の叙述のなかで、天狗に憑かれて法住寺合戦を起こした人物はそれぞれ異なっている。

(A) イカニモく／＼コノ院ノ木曾ト御タ、カイハ、天狗ノシワザウタガイナキ事也。⁷⁾

(B) コノ木曾ガ法住寺イクサノコト、偏二天狗ノ所為ナリト人ヲモヘリ。⁸⁾

(A) の引用は、天狗が後白河院の心に入れ代わって、義仲に無謀な戦いを仕かけたという解釈になる。それにたいして、(B) の引用は、天狗が義仲の心に入れ代わって増長慢を起させ、院を相手に合戦を行ったという解釈になる。二つの叙述は、「天狗」が誰に憑いたかは異なるが、院方が武家に敗れた衝撃的な事件を世を乱そうとする「天狗」の仕業と解釈している点においては一致している。しかし、一方は後白河院に、そしてもう一方は義仲にそれぞれ天狗が憑いたと語っている。この食い違いは、慈円の単純なミスによるものではなく、法住寺合戦に関する当時の二つの解釈がそのまま採録されたことによるものであらうと思われる。というのは、法住寺合戦の性格上、二つの解釈がそれぞれ可能であるからである。つまり、法住寺殿を城郭化し武装化する一方、義仲に京都から離れないと謀反と見なすと最後通牒を出し、それにもかかわらず惨敗してしまったという後白河院の行動を重視するならば、義仲を挑発した後白河院こそ天狗に憑かれたといえるだろう。それとは反対に、治天の君の意向に刃向かい、院を相手に合戦をし、結局は義仲追討の院宣を受けた頼朝・義経によって死なざるを得なかったという意味においては、院に刃向かう義仲の行為こそ天狗の所為だといえるだろう。むしろこの二つの異なった解釈こそ、法住寺合戦のもっている特徴を端的に物語っているといえる。それは、法住寺合戦の主役は後白河院でもあり、義仲でもあるということである。そして当然、法住寺合戦という不可思議な事件の責任は、この二人にあるということの意味する。法住寺合戦を語る際、焦点を後白河院にも義仲にも置くことができるという事を、二つの引用から読み取ることができよう。

一方、『平家物語』の法住寺合戦記事のなかにも天狗という言葉が一回登場するが、面白いことに、天狗に憑かれるの

は、後白河院でも義仲でもなく、知康とされている。この事実、知康の〈私怨〉というモチーフと相まって、『平家物語』の法住寺合戦の真の主役は知康であることを象徴している。それは言うまでもなく合戦の責任をとるべき存在であることをも意味する。では、「天狗付ニケリ」とされる知康の異様な行動が如何なる意味をもっているのか、具体的にみてみよう。

洛中の狼藉問題に悩まされていた院は、義仲との交渉の決裂を伝える知康の報告を契機に、天台座主明雲や寺長吏八条宮を呼んで悪僧らを募る一方、義仲に背きそうな源氏ら、北面の武士や殿上人などにも軍勢催促の院宣を下す。このようにして集められた院方の兵力は、『平家物語』ではある特徴をもつて描写されている。すなわち、戦力についての質の悪さとまじめさの欠如である。院方の主な兵力を構成しているのは、延暦寺と園城寺の悪僧らと北面の武士、それに「堀川商人町冠者原、飛碓、因地、乞食法師原」といった賤民たちであったとされている。ところが、「堀川商人町冠者原、飛碓、因地、乞食法師原」は、合戦に不馴れな人間たちで、「風モアラク吹バ倒ヌベクテ、逃足ヲノミ踏タル者共」であったと叙述されている。また、北面の武士や、若い殿上人、諸大夫などは、「面白事ニ思テ、興ニ入タリケリ」とされるほど、事態の深刻さをわきまえない存在として登場している。そして悪僧らも、合戦において固有の行動パターンをもっており、主君と強い絆で結ばれている武士に対抗できる存在ではない。二万余騎の勢を法住寺殿にたて籠もらせたにもかかわらず、三百余騎の義仲軍の攻撃に、交戦らしい交戦もできないままあっけなく敗れた背景には、このような戦力の質の低さと戦意の欠如があったとされている。

一方、このような院方の戦力の弱さの強調とは裏腹に、『平家物語』の法住寺合戦記事のなかでは、院方の大將軍としての知康の義仲追討の意欲と自信の過剰が強調されている。知康のこのような自信はどこに起因しているのであろうか。一つ考えられるのは、彼の官軍としての自負である。それは知康が義仲軍に向かって発した「昔ハ宣旨ヲ読懸ケレバ、枯タル草木モ花サキ菓ナリ、水ナキ池ニハ水堪ヘ、悪鬼悪神モ随奉リケリ」という言葉から窺える。そして、もう一つ考えられるのは、自分の勝利を支える論理を武力を超える力に求めたということである。合戦の場において、院方を支える武力を超える力とは何だろうか。その問いの答えは、合戦に際しての知康の行動から導くことができる。

知康ハ御方ノ大將軍ニテ、門外ニ床子ニ尻カケテ、赤地錦直垂ニワキ立計ニテ、廿四指シタル征矢ヲ一筋拔出テ、サ

ラリくトツマアリテ、「哀レ、シレ者ノ頸ノ骨ヲ、此矢ヲ持テ只今射貫バヤ」トゾ匂リケル。又万ノ大師ノ御影ヲ書集テ、御所ノ四方ノ陣ニヒロゲ懸タリ。
(下巻、一六〇頁)

右の引用は、合戦前の知康の様子である。続々と戦鬪準備が進んでいくなか、知康がとつた行動は、門の外の椅子に座つて、征矢をもみながら敵方を罵倒したり、数々の高僧の御影を集めて御所の四方にかけたりすることであつた。この二つの行動は、合戦に際しての大將軍の行動としてはとても異様なものである。特に、高僧の肖像画を寺院からたくさん借りてきて、御所の四方にかける行為は、呪術的な性格が強く、むしろ宗教的な行事に携わる人にふさわしい行動である。ここに法住寺合戦における知康像の大きな特徴がある。院政期の人々にとつて合戦の勝敗は、必ずしも〈武〉の力によつて決められるものではなかつた。もっと大事なのは神意を味方につけること、すなわち神仏の加護を求めることであつた。そのために、神祇官や陰陽寮の専門的な祈禱師や祈禱僧に頼んで神仏に祈るわけであるが、知康の場合、大將軍みずから祈禱師のような行動をとつていたのである。知康に祈禱師の造型をかさねているこの叙述は、ある程度事実に基づいてゐる。といふのは、法住寺合戦が起こる三日前の十一月十五日の『吉記』に、「去十二日、廷尉知康、太神宮称令託宣之由云々、近日伴男物狂也」とあり、彼に神懸かり的な側面があつたことが窺えるからである。知康の異様な行動が焦点化されてゐるもう一つの場面をみてみよう。知康が義仲の襲撃に対抗して院方の陣頭を仕切る有名な場面である。

知康ハ赤地ノ錦直垂ニ、態ト鎧ヲバキズ、甲計ヲゾキタリケル。四天王ノ像ヲ絵ニ書テ甲ニハヲシ、右ノ手ニハ金剛鈴ヲ振り、左ノ手ニハ鉾ヲツキテ、法住寺殿ノ西国ノ築垣ノ上ニ昇リテ、事ヲオキテ、時々ハマヒケリ。
(下巻、一六四頁)

赤い直垂に鎧は着ず、四天王像の絵を貼つた甲をかぶり、金剛鈴と鉾をもつて築垣の上で舞う知康のこの行動をどう解釈すべきかに關しては、幾つかの先学の研究がある。知康の異様な行動にいち早く注目した佐々木巧一は、「知康の姿態は、法咒師の行法と龍天、毘沙門、鬼等の猿楽咒師の演技とを混淆せしめ、これに猿楽者特有の滑稽大仰な装いを施したものと云うべきである」と指摘した。呪師芸を基に知康がもつてゐる芸能的な素質を強調するこの見解は、水原一や阿

部泰郎の基本的な立場でもある。芸能をキーワードとして解釈するこれらの見解に異議を提示したのが、名波弘彰の論である。氏は、合戦という極限状況にあつて芸能的所作が果たして如何なる意味をなすかという疑問から出発して、院方の兵士の兜に挿した「松の葉」に來臨している住吉大明神の神意という信仰的な文脈を復元し、そこから知康のパフォーマンスがもっている呪術的な所作の意味を明らかにした。神祇信仰という宗教的な文脈から法住寺合戦記事を分析し直した斬新な解釈であるといえよう。本稿では、『平家物語』の法住寺合戦における〈笑い〉を二次的に派生したものとす名波弘彰の見解をふまえつつ、芸能的文脈と宗教的文脈が混在する『平家物語』の法住寺合戦記事の重層性そのものに注意を払いたい。そのためには、まず大師の肖像画を集め、四方の陣に懸ける合戦前の行動や異様な姿で築垣の上で舞う合戦中の行動の中に含まれている呪術的意味合いを明らかにし、その次に芸能的所作として〈笑い〉化する過程を分析する二段構えをとる必要があると思われる。

では、まず知康の行動の原型として指摘される呪師芸のもっている呪術性について考察してみよう。前にもふれたように、佐々木巧一は、四天王の絵を貼った甲や金剛鈴を振りながら、東西南北に走るなどの特徴から、知康の行動を修正会や修二会の呪師芸に近いと指摘した。修正会や修二会で法呪師は、様々な行法の最後に乱声の呪を唱え、劍や鈴を持ち、拳印を結んで須弥壇の四周を刻み足で疾速に回る「呪師走り」を行うが、叫びながら金剛鈴を振り、時々舞う知康の動作と共通するところが多い。ここで、修正会と関連して本稿で最も注目したいのは、結願に行われる追儼という儀礼である。追儼は、「鬼走り」を中心とするもので、竜天・毘沙門天の所作に依じて、参列者が加持された牛玉杖をもって、鬼を追いまわして打つ形で行われた。毘沙門天が登場するという面で、四天王像の絵を貼った甲をかぶっている知康とつながるところがある。鬼に扮した人をうち払う行為には、障碍・穢悪をうち払うという意味合いが込められているが、その追儼の最中にしばしば群集のなかから飛礫が打たれることもあった。その飛礫は、『勸伸記』の例から窺えるように、御堂の中にまで入ることもあって、追儼の前に東と南の扉を閉めるぐらいであった。そしてひどい時には死傷者を招くこともあった。この現象について丹生谷哲一は、「堂内の参列者による鬼を打つ行儀と、堂外の群集によるツブテを打つ行為とは、不可分であったと考えられるのであり、前者が儀礼的所作であるのに対して、後者は、たとえそれが「狼藉」と呼ばれていようと、やはり、邪氣・罪穢を払い、浄化と再生を願う修正会において欠くべからざる「オコナイ」であったのに違いない」と述べている。

一方、四天王を勧請し、金剛鈴を振りながら鬼やらいをしているようにみえる知康の行動と呼応するかのようには、法住寺合戦記事のなかでも飛礮が打たれる。すなわち、院方として登場する「堀河商人町冠者原、飛碓、因地、乞食法師原」による味方打ちの滑稽な場面がそれである。味方打ちに含まれている〈笑い〉の問題については後にふれることにして、ここではまず前述したように、鬼として造型されている義仲軍をうち払う知康の行動に呼応するかのようには飛礮が打たれているという事実注目しよう。飛礮は、平安後期に入って禁制されるほど大流行し、小正月や五月五日の年中行事の他にも、諸社の祭、神輿の入浴、強訴の際にも打たれるようになる。騎馬のまま比叡山旦那院の前を通ろうとした道長に打たれた飛礮が象徴しているように、飛礮には「三宝の所為」¹⁷として受け入れられる、人間の力をこえた力があつたと信じられていた。このような飛礮の神意性・呪術性は、諸社の祭祀に行われる飛礮などの乱暴に対して禁制を出した鎌倉幕府が、その禁制のために飢饉が起きたという人々の訴えにより、やむを得ず「但於飛礮一者、非禁制之限」¹⁸と言わざるを得なかったことから窺える。飛礮に呪術的な力があるという認識は、「飛礮という暴力行為を正当化する精神的な支柱」として、鎌倉時代まで生き続けていた。

『平家物語』に戻って、飛礮を打つ「堀河商人町冠者原、飛碓、因地、乞食法師原」について考えてみよう。当時の法住寺合戦に関する記録類では、院方の主力部隊として僧兵らが挙げられており、真つ先に逃げ落ちる僧兵の姿が生々しく叙述されているが、石をもって闘うこれらの存在についての言及は見えない。では、なぜ「堀河商人町冠者原、飛碓、因地、乞食法師原」といった賤しい人々が、院方として登場しなければならなかったのだろうか。この問題について網野善彦は、堀河商人に注目し、「堀河材木商人は檢非違使庁の統括下にあつたと推定されており、これらの印地冠者原や乞食法師は檢非違使によって、洛中の天皇家の軍勢として動員されたもの」²⁰と述べ、実際彼らが動員された可能性を指摘している。が、『平家物語』の法住寺合戦記事を解釈するにあたって、実際に彼らが法住寺合戦に参加したかどうかよりもっと重要なのは、飛礮と知康との結びつきである。

七条方末ハ撰津源氏、多田藏人、豊嶋冠者、大田太郎等固タリケルモ、七条ヲ西へ落ニケリ。軍以前ニ在地者共ニ、
 「落ム折ハ打伏ヨ」ト知康下知シタリケレバ、在家人等家上ニ盾ヲツキ、ヲソイノ石ヲ取集テ待処ニ、御方ノ落ヲ敵
 ノ落ト心得テ、我ヲトラジト打ケレバ、(略)

(下巻、一六五頁)

「在地者」とされる人々は、落ちてくる味方に石を投げ滑稽な光景を作り上げるが、それは他ならぬ「落ム折ハ打伏ヨ」という知康の合戦前の命令によるものである。この場面での飛礫は、「在地者」にとつて、たとえ味方が逃げ落ちたといえ、彼らのあずかり知らぬ、まさに外部から「在地」に侵入してきた〈鬼〉をうち払う行為として行われたのである。このような意味での飛礫打ちは、知康の異様な振る舞いと対になって、修正会の追儼儀礼の祭礼的な空間を作り上げている。つまり、法住寺殿の築地の上に立つて四天王像の絵を貼った甲をかぶり舞う知康や飛礫を打つ人々は、勧請した四天王や礫の呪的な力によって、鬼、すなわち義仲軍を追い払おうとしている。もちろんそれは悉く〈笑い〉の素材になり、パロディー化されてしまう。先行研究では、知康の行動の原型として修正会の呪術芸をあげながらも、合戦という場においてそれが如何なる意味をもっているかについてはほとんどふれずに、芸能的な文脈や滑稽性だけを強調してきた。そしてその結果、追儼を共通項としてもっている知康の行動と飛礫のなかに潜んでいる呪術的な力を見逃してきたといえる。しかし、今まで芸能や〈笑い〉といった言葉で片づけられてきた所作の中には、鬼（義仲軍）を追い払うという呪術的な意味合いがあったことを、まず読みとらなければならない。というのは、知康の不可解な行動のなかに含まれている呪術性を復元し確認しない限り、法住寺合戦記事の〈笑い〉やパロディーの眞の構図が見えないからである。

第三節 知康の〈ヲコ〉性―呪術的所作から猿楽的所作へ―

前節では知康の不可思議な行為や飛礫に含まれている呪術性について考察した。しかし、このような呪術的行為は効果を生むどころか、悉く笑いの対象になってしまふ。たとえば、金剛鈴と鉦をもって舞う知康の呪術的所作は、天狗に憑かれた人の行動として語られており、義仲軍を追い払うために打たれた飛礫は、味方打ちという混乱した状況を作り出すことによって冷笑を招くことになる。つまり、これらの行為は物語の叙述のレベルで徹底的に〈笑い〉の対象になっているわけであるが、では、如何なる論理によって呪術的行為が〈笑い〉の対象に変わったのだろうか。この問題を中心に、知康の〈ヲコ〉性の問題、そして法住寺合戦記事の〈笑い〉の構造について考察してみよう。

まず注目すべきなのは、既存の研究が見逃してきた〈場〉の問題である。前にふれたように、追儼の行事の中に含まれ

ている呪術性は中世を通して生きていたものである。言い換えれば、その場にいた人々には知康の行為の意味がわかつていたはずである。したがって、もし知康の行為が修正会のようなしかなるべき呪術的空間で行われたならば、肯定的な意味合いをもったと思われる。ところが、知康が呪術的所作を行ったのは、合戦の最中であつた。問題は知康の行為そのものにあるのではなく、その行為が行われる「場」との関係にあつたわけである。つまり、知康の呪術的所作が、呪術的空間を逸脱し合戦の場に置かれた際、そのズレによつて知康の滑稽性が生まれたといえる。

では、知康の不思議な行為は如何なる眼差しでみられていたのだろうか。ここで注目しなければならないのは、「是ヲ見者、「知康ニハ天狗付ニケリ」トゾ申ケル」という文章のなかに見える、知康の行動をあざ笑う「見者」の存在である。「見者」の視線は、表現や話題の選択、評語などを通して法任寺合戦記事の至る所に投影されており、法任寺合戦記事の叙述を支配している。水原一は、雑色・牛飼・中間法師といった貴族社会に寄生する都市賤民階級の人々が、武骨なバリアンとしての義仲像を作り上げ、もう一方で凋落の支配階級としての猫間中納言や刑部卿三位頼資を嘲笑する話を作り上げたと指摘した。「人」ではなく「者」になつていたり尊敬語が使われていないことから、「見者」とは、刑部卿三位頼資の逸話を語っている中間法師と同じ賤民的な階層の人々とみてよからう。法任寺合戦の戦況を語っている「見者」が、金剛鈴と鉦をもつて舞う行為の呪術的な意味合いを理解しながらも、知康の指揮振りを見て「天狗付ニケリ」と冷笑せざるを得なかつたのは、呪術的所作の舞台が他ならぬ合戦の場であつたからである。

知康の行動を合戦にふさわしくないとするならば、合戦の場は如何なる論理によつて支配されているだろうか。「見者」の冷笑は、少なくとも呪術とは異なる別の力によつて合戦の場が支配されていることを物語っている。ここで注目したいのが、合戦の場における〈武〉の実効性に関する自覚である。〈武〉、または武士集団の威力を認める基本的な視線は、法任寺合戦記事の至る所に見える。それはたとえば、合戦の諸相を語る際、院方として参加した貴族らの悲惨な姿に焦点を当てていることから窺える。

越前守信行ト云人在ケリ。布衣ニ下結テ在ケルガ、共ニ具シタリツル侍モ雑色モ、何カ失ニケム、一人モ不見。二方ヨリハ武士セメ来ル、一方ヨリハ黒煙覆ヘリ。イカニスベキ様モナウテ、大垣ノ在ケルヲ超ムくトシケル程ニ、ナジカハ可被超、後ヨリ前へ射貫レテ、空様ニ倒テ死ニケルコソ無慚ナレ。

(下巻、一六八頁)

引用は、越前守信行が射られて死ぬ場面である。藤原信行の死は、『愚管抄』に「殿上人已上ノ人ニハ美乃守信行ト云者ゾ当座ニコロサレニケル」と取り上げられているほど、天台座主明雲や円惠法親王の死とともに、法住寺合戦の重要な出来事の一つであった。語り系諸本が越前守信行の死を簡単に叙述しているのに対して、延慶本は引用から窺えるように、身辺を保護し世話をするはずの侍や雑色がいなくなったことや、火災による煙と敵方の武士が迫ってくるなか、垣を超えようとして後ろから射られて命を落とす瞬間などが詳しく語られている。信行の慌てて逃げようとする姿は、「大垣ノ在ケルヲ超ム〈トシケル程ニ〉の「超ム〈」という動作の繰り返しや「ナジカハ可被超」という冷やかな表現によって、何とも愚かしい動作として語られている。途方に暮れた信行の狼狽ぶりや惨めな死は、合戦に慣れない貴族の姿を前景化し、合戦の場を支配しているのは「矢」に象徴されている（「武」の力であることを物語っている。このような合戦の場における貴族の無力さは、同候していた貴族ばかりではなく、武装をして籠もっていた貴族の場合にも同じく見える。

播磨中将雅賢ハ、サセル武勇ノ家ニアラネドモ、武勇ノ人ニテオワシケレバ、面白被思ケレバニヤ、兵杖ヲ帶シテ参リ籠ラレタリケリ。(中略) 楯六郎蒐入テ、頸ノ骨ヲ志テ射タリケルガ、烏帽子ノ上ヲ射コスリテ、妻戸ニ矢タチニケリ。其時、「我ハ播磨中将ト云者ニテアルゾ。誤スナ」ト、騷ヌ鉢ニテ宣タリケレバ、楯六郎馬ヨリ飛下テ、生取テ我宿所ニ誠メ置テケリ。

(下巻、一六七―一六八頁)

播磨中将雅賢は勇んで法住寺殿に籠もったものの、いざ合戦が始まると逃げ腰になり、結局楯六郎の「矢」から死を免れるために、自分の素性を明かし、生捕りにされた。合戦に不馴れな彼らには、一命をとりとめるのが精一杯であったろう。引用の中で雅賢を「武勇ノ人」であるが「武勇ノ家」ではないと強調していることは注目に値する。武装して院方として籠もったものの、彼の出自は武術を芸とする家柄の武士ではなく、合戦とは縁遠い貴族であったということである。このような観点は、明経道の博士にもかかわらず狩衣の下に腹巻を着た主水正近業に対して「明経道博士也。兵具ヲ帶スル事不可然」と非難する声につながるものである。言い換えれば、武士以外の人がいくら勇ましくても、もしくは武器を持って甲冑を身にまともつても、武士になることはできないし、ましてや武士集団を相手に闘うことはできないということ

である。

合戦の場において、武士と貴族を区別するこのような叙述は、法住寺合戦記事を理解する上で重要なポイントである。というのは、『平家物語』は法住寺合戦を院近臣を中心とする都の貴族と義仲軍との戦いとして描写しているからである。もちろん院方にも摂津源氏や河内源氏といった武士集団が加わっていたが、物語の焦点は彼らの奮戦より、越前守信行の狼狽ぶりや明経道博士の死に当てられている。『六代勝事記』は法住寺合戦の大敗の原因を「冥顕の擁護をあやまつ」「非職の兵杖をそむく」という二つの事柄に求めているが、「非職の兵杖」とはまさに播磨中将雅賢と主水正近業の例と符号しているといえる。職掌としての専門性、すなわち実質的な戦力としての武士集団に対しては、一時的に武器をもち、甲冑を身にまとうことぐらいいでは到底対抗できない当時の現実が背景にあったのである。これらの逸話は、合戦において武士の力、〈武〉の力を遺憾なく物語っている。

〈武〉の質と量によって合戦の勝敗が決まるということは、保元の乱後の数々の合戦を通してすでに検証済みのことであつた。したがつて、官軍の大將軍で合戦を指揮すべき存在が、呪術的な行爲を行い、それによつて合戦を勝利に導こうとすることは、もはや〈場違い〉的な行爲でしかない。真面目に行う呪術的所作と何の実効性を伴わないこととの落差こそ、知康の行爲を〈笑い〉の対象とする真の理由であるといえよう。〈武〉に関する自覚のなさともにもう一つ注目しなければならないのは、すでにふれた彼の官軍としての自負である。

汝等奈十善帝王ニ向奉テ、弓ヲ引、矢ヲ放ム事、争可仕。昔ハ宣旨ヲ誦懸ケレバ、枯タル草木モ花サキ菓ナリ、水ナキ池ニハ水堪ヘ、悪鬼悪神モ随奉リケリ。末代ト云ワムカラニ、東ノ夷ノ身ニテ、争カ公ヲ可奉背。況汝等ガ放矢ハ還テ己等ガ身ニ当ルベシ。拔大刀ハ身ヲ可切。御方ヨリ放ム矢ハ征矢トガリ矢ヲスゲズトモ、己等ガ甲冑ニハヨモタマラジ。

(下巻、一六四頁)

右の引用は襲撃する義仲軍に向かつて知康が放つた言葉である。知康の考えでは、この合戦は「公」(天皇)と「東ノ夷」の戦いである。したがつて彼の論理によれば、天皇(院)に刃向かつて放たれる矢は、官軍に当たるはずもないし、また官軍として戦う自分たちの矢がたとえ「征矢トガリ矢」でなくても、敵の甲冑を射抜かないこともない。「宣旨」云々

の所は、まさに「宣旨ぞ」という一言の威力に驚が進んでとらえられたという「五位驚」的な発想が見られる。しかし、宣旨の呪術的な力や「王権」の絶対性を語る「五位驚」は、醍醐天皇時代のエピソードであり、法住寺合戦より遙か昔のことである。兵藤裕己がいみじくも語っているように、「平家が頼朝追討にむかう宣旨も、また頼朝が入手した平家追討の院宣にしても、すでに双方における名分のレベルにまで相対化されている」。つまり、時代はもう「王権」という権威が相対化されはじめ、すべてが武力による力関係によって決定される時代に入っていたのである。外部の圧力によって、院宣が発給されるようになったこと自体が、院宣の虚妄性を物語っている。それにもかかわらず、依然として「宣旨」のもっている言霊信仰的な呪力にすがり、合戦の場において「武」の力に背を向けている知康は、時代錯誤的人物であり、彼の「ヘラコ」性の根源はまさにここにあるといえる。義仲は、知康が語る「王権」の論理をあざ笑い、「武」の力をもとに襲撃に成功するのである。

知康と知康をあざ笑いながら見ている存在（「見者」）との間には一定の距離がある。そしてその距離を支えているのは、合戦における「武」に対する認識の差である。つまり、合戦の「場」における「武」の力を認識している存在であつてはじめて、知康の行動を合戦の場にふさわしくないと冷笑し、「ヘラコ」として造型することができる。「見者」はまさにこのような存在であつた。このような説話の担い手の視線によるからこそ、法住寺合戦記事は公卿日記や『愚管抄』の惨憺たる合戦譚とは異なる「ヘラコ話」として語ることができたと考えられる。知康を「ヘラコ」として仕立てようとする、もしくは法住寺合戦を滑稽な笑話として語ろうとする叙述の意図は、時代錯誤の宣旨の威厳を背景に大言を吐いた知康が、「人ヨリ先ニ落」ちたことや頼朝の機嫌を窺い、「有事無事クドキ立テ細カク申」して頼朝の鬻鬻を買う場面など、至る所に見える。

最後に、知康の滑稽性と関連して、知康の「ヘラコ」性をさらに複雑化している「芸能」の問題について少し付け加えておきたい。前にもふれたように、先行研究では、金剛鈴と鉦をもつて舞う知康の不可思議な行為を芸能的な所作と解釈し、知康の滑稽性は呪師猿楽という芸能的なものに由来していると解釈してきた。芸能的な文脈を重視するこれらの見解には、いくつかの原因があると思われる。一つは、修正会や修二会のような国家的な宗教・呪術空間に、民間の猿楽の芸能者たちが強力に組み込まれ、追儺や追儺的儀礼に猿楽が関与したという事実である。つまり、知康の行為の基になつて

いる修正会の諸儀式のなかに、特に呪師猿楽のなかにはずで、目を見張らせる見物としての芸能的な要素が色濃く存在

していたことである。そしてもう一つ、そこには鼓判官と呼ばれるほど芸能に才能があつた知康の実像がかかわっている。彼には、今様を歌つて後白河院の心をつかみ、蹴鞠や鼓の卓越さによつて二代将軍源頼家の寵愛を得るほど、「為政者を魅きつけてやまない不思議な魔力ともいふべきカリスマ性」があつた。鎌倉に下つた知康がひふ（手玉）をつき、会うことを拒んでいた頼朝を「誠二名ヲ得タル者ノ駿ハ有ケリ」と感嘆させ、会うことができたという後日譚は、彼の芸人魂を物語っている。

芸能に堪能であつた知康の実像とも関わるが、もう一つ、知康の滑稽性を芸能に結びつける重要な役割を果たしている事柄がある。知康の〈私怨〉を生むきっかけになつた鼓に関する彼の名声である。法住寺合戦の前、早く狼藉を制止しろという院宣に対する義仲の怒りは、使者として派遣された知康に集中され、特に彼の鼓判官というあだ名がその的になる。『平家物語』のなかでは法住寺合戦に至る政治的な場のかけひきと彼の鼓の才が緊密に結びつけられているのである。要するに、知康の所作と呪師猿楽の類似性や芸能に堪能であつた知康の実像、そして知康の鼓の芸と法住寺合戦を結びつける物語の構想によつて、法住寺合戦記事の知康の滑稽性には、芸能、すなわち猿楽的な雰囲気は漂うようになったといえる。これらの諸要素によつて、知康の不可思議な所作は猿楽的な所作と解釈され、知康の〈ハコ〉性も猿楽的なものとして読みとられてきたわけである。

しかし、ここで肝心なのは、知康の行為が呪術的であり、かつ芸能的であるという両義性をもっているということである。修正会のような法会や祇園祭のような御霊会は、悪魔や疫病などを払う呪術的な意味合いをもつ祭礼の空間であるとともに、しばしば田楽や猿楽のような芸能の場になつていたように、知康の行動も呪術的であつた芸能的である。宗教的・呪術的な諸行事の中から芸能が派生するという芸能史の認識を考えあわせると、知康の〈ハコ〉性をひたすら猿楽的な所作によるものとして理解するのは、あまりにも単純な解釈であると言わざるをえない。実際、呪術という観点に立つて考えると、知康の〈ハコ〉性は、合戦の場での〈武〉の力に背を向けて、呪術的行為や宣言の呪術的な力にすぎることである。修正会に導こうとする時代錯誤的な、また〈場違い〉的な側面に由来していると解釈することができる。知康の滑稽性は、そもそも滑稽を旨とする芸能的な所作によつてもたらされたものではなく、呪術的な所作と合戦の〈場〉とのズレが、「見者」の冷やかな視線を通して浮き彫りにされた時、はじめて生まれたものである。換言すれば、知康の〈ハコ〉的行動にまつわる芸能的な色彩は、呪師猿楽の芸能性や知康と芸能の密接な関係によつて引き寄せられたイメージである。

といえよう。

第四節 むすび

本稿では、法任寺合戦記事の特徴である笑話形式を可能にしている知康の〈ヘヲコ〉性について考察した。法任寺合戦記事に見られる〈笑い〉は、先行研究で指摘されてきた芸能的要素の他に、呪術にこだわることによる〈場違い〉・時代錯誤的行為による滑稽味が含まれている。つぶてや知康の滑稽な行為には、祝祭空間における鬼(悪)の追放という呪術的な意味合いが含まれているが、それを『平家物語』の叙述は、天狗が憑いた行動として、或いは味方打ちとして語ることによって、読者の冷笑を誘っている。このような合戦のパロディー化は、結局のところ、深刻な戦局、院方の敗北という悲惨な結果という法任寺合戦の〈負〉の部分の笑いをもつて隠蔽する役割を果たしている。知康の〈私怨〉という構想や〈ヘヲコ〉的造型によって、院政政権の危機は一篇の笑話に変質され、矮小化されるが、その裏面には法任寺合戦という負け戦を語るに際して、後白河院との関わりを隠蔽し、〈王権〉に傷つける叙述を避けようとする意図が働いているといえよう。法任寺合戦記事における〈王権〉の問題や、そのなかでの知康の義仲の〈ヘヲコ〉的造型の意味、そしてその〈ヘヲコ〉性の反転については、稿を改めて論述するつもりである。

【注】

- (1) 阿部泰郎「『ヲコ』の物語としての『平家物語』」(『平家物語 研究と批評』、有精堂、一九九六年) 一一三頁。
- (2) 河内祥輔「頼朝の時代 一一八〇年代内乱史」(平凡社、一九九〇年) 一〇七頁。
- (3) この他には、法任寺合戦後、義仲の処置による解官者の名簿に知康の名前がみえるぐらいである。
- (4) 『玉葉』治承五年一月七日条。
- (5) 『吉記』寿永二年七月二五日条、二六日、二八日条。
- (6) 『玉葉』寿永二年一月二日条。
- (7) 岡見正雄・赤松俊雄校注『愚管抄』(日本古典文学大系(岩波書店、一九六七年) 二六一頁。
- (8) 『愚管抄』二六三頁。

- (9) 橋合戦の簡井の淨妙明秀がその典型的な例であるが、明秀は橋の上で勇敢に戦って一芸を披露した後、合戦の真つ最中にもかかわらず、甲冑を脱ぎ、白い僧衣を着て、奈良に向かう。簡単に戦線を離脱することができるといった面で僧兵は、主従が強い絆で命掛けで戦う武士とは異なる行動パターンをもっているといえる。
- (10) 佐々木巧一「鼓判官―平家物語の笑い―」(『國學院雜誌』六七卷一二号、一九六六年)三四頁。
- (11) 水原一はさらに知康の滑稽さ、道化性を指摘しており(『平家物語 中』(『新潮日本古典集成』の頭注)、阿部泰郎は、檢非違使という知康の職と猿樂呪師との関係にふれている(前掲書)。
- (12) 名波弘彰「義仲物語(法住寺合戦)」における平知康のパフォーマンスをめぐる(『文芸言語研究 文藝篇』三七号、二〇〇〇年三月)一九一頁。
- (13) 佐々木巧一、前掲書、三三三頁。
- (14) 丹生谷哲一「檢非違使 中世のけがれと権力」(平凡社、一九八六年)二〇七頁。
- (15) 弘安二年正月一四日条。「追難以前東南両面扉閉之、為無狼藉也。前々追難之時、以飛礮打入堂中、今度無狼藉、無為神妙也。」
- (16) 丹生谷哲一、前掲書、三三三頁。
- (17) 『小右記』寛弘九年五月二四日の条。
- (18) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集 第一卷鎌倉幕府法』(岩波書店、二〇〇一年)、七四頁。追加法二八条は、寛喜の大飢饉の最中に
出されている。
- (19) 守屋毅「祭礼の場の暴力―印地―」(『中世芸能の幻像』淡交社、一九八五年)一一七頁。
- (20) 網野善彦「中世の飛礮について」(『異形の王権』平凡社、一九九八年)一九二頁。
- (21) ただし、語り系諸本では、「若き公卿殿上人、「風情なし。知康には天狗ついたり」とぞわらはれける」(高野本)というふうな、公卿や殿上人という貴族も目線によって知康の行動が語られている。戦場にはいた公卿や殿上人によって知康の行動語られる可能性がないとはいえないが、読み本系では「者」としている以上、貴族とみることはできない。
- (22) 水原一「義仲説話の形成」(『平家物語の形成』加藤中道館、一九七一年)五一頁。
- (23) 『愚管抄』一一五九頁。
- (24) 『六代勝事記・五代帝王物語 中世の文学』七一頁。
- (25) 兵藤裕巳「平家物語〈語り〉のテキスト」(筑摩書房、一九九八年)一〇八頁。
- (26) 松岡心平編「鬼と芸能―東アジアの演劇形成」(森話社、二〇〇〇年)三四頁。
- (27) 名波弘彰、前掲書、一七七頁。